
とある英雄の物語

也屋拓郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある英雄の物語

【Nコード】

N8702Z

【作者名】

也屋拓郎

【あらすじ】

かつて龍と人間が共存していた。

プロローグ

風が強く吹くことを龍の咆哮と例える。このアルトリア大陸ではそう呼んでいた。

なぜなら古くからの伝承で人間はかつて龍とともに生活をしてきたと言われている。しかし今ではもう昔のことであり、噂でしかない。

ゆえにその伝承はもう語りであり、言い伝えでしかない。真実だと誰も思わないのが末だ。

その大陸にある小さな光がともされる国から民族の音が聞こえる。その音にあわせて響く手拍子と歓声。『空』を支配する我らにとつて目もくれない光景だった。

我らは十全な生き物である。孤独であろうと我らは生命を食らいその生命を糧にして生き、そして駆逐という蹂躪を求め我らは炎を吐く。そして我らはその存在を証明してゆくのだ。

ゆつくりと旋回しながら我らはその嬉々として踊る彼らを今一度見つめる。

なんと儂い生き物なんだろうか。笑いあい、踊るその姿はまるで蟻の列を眺める様だ。今襲えば我らの血肉として死すしかない存在非力である。

びゅうと風を引き裂く音が我らの耳を掠める。龍の咆哮が聞こえる。

我らは風を凪いだ。喧しい風が静かに消え去る。

どうしてだろうか？ 我らは孤高にして孤独の存在であるはずなのに……。毒が体中を回るようなこの気持ち。それは鼓動を強く打ちつけ、そして急速に早くなる。

我らは恋をした。

彼らに、恋をした。

世界は混沌に満ちている。

アルトリア大陸のある国にいた一人の魔導師はそう高らかに言い放った。その魔導師は国の中で魔力もない劣等師マルグという烙印を押されていた者だった。

マルグと呼ばれたものは国民より地位の低い権限をあたえられ、国民から非難を受けるばかりだ。名誉の高い魔導師は王宮魔導師として王の次に偉い権限がある。魔導師の権限は雲泥の差があるほどに広がった。

そのマルグは王宮の前で高らかに言い放った罪で魔導師は王宮の牢獄へと閉じ込められる。

罪状はもちろん死刑。

国の平和を狂わせる異端者として国民の罪の見せしめとなった魔導師は王宮の牢獄にわずか四日しかいなかった。

しかしその牢獄にいた牢番は魔導師の声をずっと聞いていた。

「世界は混沌に満ちている。早く、秩序を正せねば……英雄を早く見つけなければ……」

英雄とは何なのか？ 秩序を正す？ 牢番はそんな言葉を思い出して見ては自分には関係のないことだと頭を振るって、忘れることに専念した。

その一カ月後その国は芋虫を食い殺す蠅のように跡形もなくなっ

た。

邂逅

「ヤーレ！ ソーレ！」

掛け声がかかる。広場の中央には大きな薪を組み合わせて燃やしている。男たちはその火に薪を二人係で投げると火とぶつかり合い、火の粉が飛び散る。それらを観客は歓声を上げていた。

「踊ろう！ 飲もう！ 我らの謝肉祭！」

舞台の上にいる男が弦楽器を担いで歌っているその声はもうかれているがそれに合わせて女たちは華やかな衣装を着て風のように踊っていた。右へ左へ動き、手を上げて拍手をする。その拍手にあわせて周りの観客は手を叩いた。

その中に一人手を叩かない男が一人いた。

その男は同じ席に座っている男と酒を飲みあっている。向かいの男も顔を真っ赤にしてぐいぐいと酒を飲んでいたが、ばたりと机に突っ伏した。

「俺の勝ちだ！」

高らかに叫び立ち上がる男の名はシグナフリードといい、皆からはジグと愛称がある。年は十八。中肉中背で白銀の髪を有し、耳が隠れる程度しかない。この国の守護騎士をやっており、日々訓練を絶やさない男だった。長身は片親で母親しかない。父親は大工をしており、教会の建設中に足を踏み外し亡くなっている。

もう三年前の話である。

そのジグは据わっている目を擦り、席を外す。

「おい！ ジグまだ勝負はついてねえぞ！」

「便所だ。お前も来るか？」

けつと違って、飲み相手は酒を飲んだ。口端から酒が漏れている。そのうち酔いつぶれるだろうとジグは思考を回す。

しばらく先に行ったところに公衆の廁がある。ジグはそこまで歩いてゆく。

建物の間を歩くと龍の咆哮が聞こえた。ジグはその咆哮を心地よく耳を澄まして聞いている。耳をかすめ通るその声は耳元で問いかけるようなものだった。不快なものでもなく、寒い季節になると鋭利な葉で切られるような痛みを思えるものの、手で暖めればそういう痛みもすぐになくなった。

ジグは深く息を吐くと、さっきまでの下腹部の緊張が和らぐ。急いで中に入って用を足した。

ジグがいるアルトリア大陸は世界で一番大きい大陸である。その大陸の大きさは国が三百の国と千の植民地もあれば大体が分かるだろう。その彼がいるニーベンルグ王国はアルトリア大陸の中でそれほどおおきな国家ではない。軍事事業はそれほど大きいものではないし、植民地など一個も保有していない。

ニーベンルグ国はこの寒い時期になると暖かい季節に入っても厄が来ないようにと言う意味で祭りをする。広場に長年飾っていた厄除けの飾りを集め、燃やし、それを天に帰すという考えで大きく炎を育てるのだ。

元の広場に戻ると飲みあいをしていた男はもう死人のようにつぶれていた。

「はあ」

周りにはたくさん飲んだあとがある。要するに、吐瀉物だ。最初は者と一緒に出ているがその後はもう酒しか出ていない。その男の口からするのは胃酸の匂いだけだった。

ため息を漏らすほか何もなかった。

男の家に身柄を渡す。

「ジグ君毎回毎回ありがとうね？」

男の妻は彼を家に入れると微笑む。

「いえいえ、そこまでのことはしてないです。この人は毎度のよう

に酒を飲んではずつ倒れるんですけど……」

「たぶんジグ君が毎日のように運んでくるからじゃないかな？」

「毎回って、確かにそうですね……」

ジグは少し呆れるように笑うしかなかった。

「もう、こんな人なんて道端に捨てておけばいいのに。ジグ君に迷惑かけちゃってもう……」

「では俺はこれにて……」

「あ、これもつていきなさい。お裾分けよ。昨日組合の人が猪を獲ったみたいだね。くれたのよ。だから燻製にしたからよかったらあげるわ」

「あ、ありがとうございます」

彼女はそういつて燻製にした肉をくれた。二人分以上の量だ。たぶん食べ終わるのに相当時間がかかる。それをジグは手に提げて、一度礼をした。

「ではこれで……」

「また相手してあげてね？」

「もちろん喜んで」

ジグは男の家を後にした。

もう完全に明け方になりかけている。これだともう祭りはもうやっつてないだろうなあと少し残念そうに思った。なにせその祭りは十八未満は参加ができないからである。初めての祭りなのにちょっとしか参加できなかったことに後悔をする。

だが、そこで根が折れる彼ではない。一縷の可能性を求めながら広場へと足を進めた。

広場の近くまで行くと炎の光が見える。ジグはよかったと思いつを進める知らず知らずのうちに足は大きく歩幅を広げていた。

しかしそれは違った。

やけに静かなのだ。その炎が暖かいもののはずなのに冷たく、そして静かな恐怖でしかない。

喉を鳴らしその広場に顔を出す。広場を中心にして映える建物は

幻想的だった。もちろんのように周りには誰もいない。もう解散した後であり、酒の匂いも、肉の匂いも何もかもなかった。閑散としたその広場に火はついていて、といても組み合わせた木が燃えているわけではなく、轟々と燃える材料は巨大な丸太だ。大の男が五人がかりで持つてこないと無理な大きさの丸太で、その中央部分が集中して燃えている。その木はまだ生木で時々爆ぜる音がたまに聞こえる。その火の目の前で少女が立っていた。不思議な光景だった。生木の燃える広場で少女が立っている。その光景を見て誰もが不思議である。逆光で見えないがその影から容姿は整っているのは十全に分かる。その少女は年からして十五か。

少女の右手がゆっくりと動いた。そして一歩右へと跳躍する。着地は音もなく、そしてくるりと一回転した後、軽やかに跳躍をする。その動きは祭りの踊りの一節だった。

それを単調でありながらも綺麗で繊細なその動きにジグは見蕩れていた。曲がなくても踊りを見るだけで曲が聞こえる。

龍の咆哮が聞こえる。

もっと見てみたい。その下心でジグは知らない間に歩みよっていた。なぜならそれほど少女の動きはあまりにも軽やかで、そして美しかった。

だがジグの足取りはなぜか普通に歩いているわけではなく、忍び足だった。少女の踊りを近くで見たいと思い邪魔をしたくなかったのだ。だが、足元に落ちているのは細い枝だ。その枝葉葉をつけて床に散りばめられている。足を踏み出すとみしみしと木がしなる音が聞こえる。

細心の注意を払ってジグは踏み出すと踏み場が悪かったのかばきんときが綺麗に鳴り響いた。

細心の注意を払ってジグは踏み出すと踏み場が悪かったのかばきんときが綺麗に鳴り響いた。

「っ！」

少女は振り向いた。

逆光に隠されていた容姿は明らかになる。綺麗な背中中央へこんだ背筋に綺麗に形作られた腹の筋、その中央にある小さな臍。美しい線は素肌だった。控えめにある乳房も露出している。

裸だった。一糸纏わぬその姿にジグは声を漏らした。

ジグはそこで思考が停止した。彼女の目は鋭くそして青く美しい虹彩で蛇のような鋭い動向を有している。髪も火の光でまったく分らなかったが、空色で綺麗だった。ジグは彼女の目を見つめたまま一言言った。

「綺麗だ」

「……！」

突然ジグの隣の石畳が砂埃と一緒に爆ぜた。爆風のような衝撃がジグを襲う。頬に石飛礫が襲う。小さい石が当たってもそれほどもないが数であたるとそれは打撃に等しい。ジグは横目でその爆ぜた原因を見た。

青い鱗に覆われた尾。規則的に流れるその鱗は魚とは違い逆立ってまるで一種の鈍器のようだ。だがその尾は蛇とは違い魚のようなひれを持っている。

「貴様、下種な分際で我を綺麗オレというか」

透き通るその声。女性特有の楽器のような音のようだ。ジグは真っ直ぐその少女を見つめた。

「綺麗じゃないのに綺麗というのはおかしいと思わないかい？ 俺は君が綺麗だとおもった。だから綺麗というのに異論はあるのか？」

彼女は頬を染めていた。ジグは一步前に足を出した。

「くるな」

「でもこんな季節に服を着てないのは見ている俺も寒くなる。お願いだから何か着てくれないか？」

確かにと彼女は頷いた。実際自分の状態を分かっていたらしい。

実際胸を腕を手で隠しているわけで、それなりの羞恥心があったら

しい。するとざわざわと背から青い鱗が張ってくる。胸を隠し、そして下へと鱗が伸びて行き、臍を隠すように鱗が広がる。

ジグはそれを確認した後、彼女に問う。

「君はもしかして龍か？」

「掟を守り、誇り高き龍だが人間の貴様はなにを聞きたい」

「いや、確認だただの」

予想外の答えに彼女は肩透かしを食らった。無感動のほかにはその返事にさつきまで隠していた鱗がざわざわと動いていた。そして肩を震わせると怒声をあげる。

「き、貴様のような浅慮なやつに会ったのは初めてだ！ 貴様を食ってやる！」

少女は手を上げジグに向けて振り下ろそうとする。

「俺を？」

ジグは質問を返す。すると少女の手は止まる。

「そうだ！」

「ならなんですぐに俺を殺さないのさ」

「うっ……」

彼女は言葉を詰めた。

「お、掟に『無知には全能の知識を教える』というものがあってだな。それを完遂せねば殺すこともできないのだ」

だから、と彼女はつなげる。

「貴様が質問をすると私は殺すこともできないし食う事もできない。貴様は黙って羊のように殺され、食われろ！」

そういつて手を上げると突然空腹の音が響いた。ジグではない。

ジグは祭りであらふくと肉を食い、男と酒の飲みあいまでした。明日の昼まで食べなくても大丈夫なくらい満腹だったのだ。ならば腹の虫を鳴らした者は。

「腹減ったのか？」

「う、うるさい！ 黙って食われればいいのに！」

顔を赤くしてしゃがみ込む。ジグはただただ彼女を見ているだけ

だった。

これが…龍なのか……。

ジグは頭を少し抱えた。

龍の猫舌。

家に帰るとジグの母親、エレナがジグの帰りを待っていた。

「あら、お帰り、おそかった…その子は？」

「あ、ああただいま。この子はさつき道端で拾った子んだけどちよつと介抱してもいいかい？」

ジグは冷や汗をすこし流した。エレナの元に女性を連れてきたことがない。初めてのことでジグは少ししどろもどろになっていた。

ジグが背負っている気高き龍は青い顔をしてジグの首元に顔を伏せていた。いかにも病人だという顔をしている。

「いいけど、この子の名前は？」

「いや、分からないけど…まだ幼いし、こんな寒い時期に外に放つとくなんてできなくてさ…。だめかな？」

「んじゃジグ、貴方のベットに寝かせなさい」

ジグはえ、という顔をしていたが自分がまいた種だと思い諦めた。

「そうだ、これお裾分けだつてさ」

ジグはそういうと燻製された肉をエレナに渡す。

「この子にご飯作らなきゃね。粥を作るから寝かしたら下に来なさい」

「ああ、分かった」

ジグの家は小さな通りの石造り二階建てで、二階がジグの部屋とエレナの部屋がある。下には調理場と浴槽がある構造だ。

ジグは部屋に入るとため息を漏らす。

「誰が幼いだと…:…?」

「言葉のあやというのがあるだろう?」

「失礼なこれでも我は^{オレ}二百と十六歳だ」

二百は余分なんだなとジグは思った。彼女は床に立つとジグの部屋を見回す。部屋には特に何もなく、あるのは壁に立てかけてある木製の剣と、手甲。そして窓の下にジグのベッドがある。ベットは

エレナの毎日の掃除によって白く清潔だった。

「いい母親だな」

「エレナフリード。俺の自慢の母親さ」

少し顔を赤くしてジグは言った。自分で自慢という言葉を使うのが恥ずかしかったのだ。彼女はふーんと言った後、ベットに座った。「貴様の名は？」

「俺か？俺はシグナ、シグナフリード。ここらのやつからはジグとよく呼ばれる。シグナが言い難いかららしいけど。まあジグと読んでくれてもかまわない」

「たわけ、誰が呼ぶものか。飯をくれる者の名を聞くのが道理であるう？」

「… 際ですか」

「それにオレは名前を言わない。名前を人間に言うとのろいをつけられると前に聞いたからな」

難しい女だとジグは頭の隅で思う。

「だが、名乗ってもらったにはこちらも名乗らねばな」

コホンと咳払いを一つする。

「オレの名はアリエ、アリエドラゴニクス。ニクスは王という意味を持つ。だから、オレは生まれながらにしての王だ」

「アリエ… ね」

「なんだ？疑っているのか？」

眉をひそめるアリエ。ジグは少し笑ってからなんでもないといった。

「そうだ、今から飯とってくる。ここで待ってる。場合には母さんが来るかもしれないからそこで寝てる」

「言われなくても分かる」

ジグは大丈夫かなと思いつき外に出た。廊下は板張りで歩くとぎしぎしと鳴り響き思いつき踏みつけると底が抜けそうだった。階段を下りると、エレナが鍋に肉と穀物を入れて煮込んでいた。

「寝かしてきた」

「あの子の名前は？」

「アリエだつてさ」

「へえ、可愛い名前だね」

エレナも同じような反応をした。エレナとはアルトリア国の中の意味では『可愛い子』という意味なのだから皆同じ反応をする。

「明日は周回があるから私いないけど、ジグは明日行かなきゃだめなの？」

「あー明日はちょっと休むよ。アリエを介抱しなきゃいけないし…」

「そう、おいたはだめよ？」

「怖くてできないよ」

と本気でいった。なぜなら相手は龍だから。

粥を器によそったあと、コップに水を入れて上へと上がった。部屋を空けるとアリエはベットですやすやと寝ている。

「アリエ？」

名前を読んでも返事がない。どうやら本当に寝てしまったらしい。

「飯！」

突然の覚醒でジグは驚いた。飯の匂いで覚醒するとか子供しかしないことだ。ということはさっきまで寝た振りだったということか。

「野菜は言っているが大丈夫なのか？ 主に玉ねぎとか…」

「オレを犬か猫だと思っているのか？ 下等な分際で」

そうですかとジグは胃って椅子を取りに行く。

スプーンをしっかりと握ると粥を掬って口に入れる音が聞こえた。その瞬間髪の毛や鱗がぞわりと動いた。何事かと振り向くと暴れ

ようとするが我慢している。

「水か？」

ぶんぶん頭を揺らす。ジグは冷たい水を渡すとそれを奪い、ぐいっと飲み込む。すると今度はおなかを押さえて暴れ始めた。

「こ、こんな熱のあるものを食べさせて、オレに恨みでもあるのか！」

「粥は普通そういうものだ。というか結構温いと思うが…どれ？」

ジグはスプーンをアリエからも受け取ると一口入れる。あつ、とアリエは短くいつて顔を伏せる。

粥はそれほど熱いわけでもない。逆に持つてくるまでに冷えてそこそこいい感じになっている。

「ぜんぜん熱くないけど…どうした？　なんで黙っているんだ？　まさか焼けどでもしたか？」

「……」

アリエの顔がいつもより赤い。

「…猫舌なのか？」

「う、うるさい！」

真つ赤になつてスプーンを奪うと今度は少なめで息を吹きかけてから口にした。すると突然柔らかい顔をしてはあとため息を漏らしていた。

「…面白いやつだなお前」

「食つてやろうか？」

それは勘弁願おうとジグは言つて椅子を見つけ引き寄せて座る。

「それでその龍のお姫様がどうしてこんなところにな？」

「…ここからオレが三日ほど飛んだ国が死んでいた」

「国が？」

うぬとアリエは言う。

「我ら龍族と貴様ら人間はもともと共存していた。それは昔からの伝承であると知つているだろう？　何百年も昔の話だ」

ジグは返事をする。昔話はエレナからよく聞かされていた。

「我々はもともと二つの種族で一つの存在だった。だが、それは仲睦まじい親交ではなくお互いの共存のために生活していたのだ。要するに我々は利用し利用される関係だった」

「それが今と昔に何の意味がある？」

「大いなる敵が封印から目覚めようとしている」

「アーク？」

「我々が共存していた理由の一つ。この世界には人間と龍とアーク

の戦争があつたのだ。そいつらは我々の力に負け、封印された。その封印が最近弱まり、少しだが漏れ出てきている」

皿にもりつけられていた粥は無くなった。それをジグに渡した後水を飲んだ。

「我々がまたここに戻つた理由はそのアークを駆逐し封印するためだ」

ジグの朝は早い。エレナより早く起きたジグは一番に外へ出る。手には木製の剣があり、毎日の稽古を行うためのものだ。といつてもこの朝早くに行つても守護騎士団の宿舎には人がたくさん集まっている。

「おー、ジグじゃねえか！ 相変わらず遅いぞ！」

「あんたらが早いだけじゃないか？」

ははは、と大きな声が響く。朝早いこの時間帯は頬を引つ張るとぴりりと適度な痛みを伴う。

「そうか？ おい！ お前何時からいた！」

「昨日の夜からだ」

それは早いというより泊まっていたらうと冗談交じりの笑い声を上げる。するとごほんとかいひが聞こえた。それと同時にみんなが整列をする。ジグは若い騎士であるために後ろの方へとなる。守護騎士団の整列は単純で年季の入っているものから前に並ぶのだ。といつてもそんなに長く変わるわけでもない。守護騎士団といつても定年はないのだ。といふことは死ぬまでそこにいるものもある。といふことは前列には老人が立っているといふことだ。

「おはよう。皆」

おおお！ と歓声が上がった。

「あら、おはようアリエさん」

「さんはいらぬ。アリエでいい」

エレナが皿を洗っているときにアリエが二階から降りてきた。

「そうだ、この度は泊めさせていただき誠に申し訳ない。こんな私だが、何かやれることはないか？」

「そうね…まずは服を着てもらおうかしら？」

アリエは全裸だった。アリエはゆっくりと下を見ると前が全開で露になっていた。

「は、ななな！」

「私の服でいいなら」

「す、すみません」

エレナはくすくすと笑いながら自室へと向かう。アリエもエレナについてゆき申し分けそうにいた。

「はい、これでいいかしら？」

「ありがとう」

アリエはもらう間までに自分の気持ちを落ち着かせいつも通りの口調で言った。すこしだけ上ずっていたが気にするものでもないだろう。

「シグナはどこに？」

「ジグなら騎士宿舎に向かったわ。ここから真っ直ぐ行って、大きな通りがあるからそこを右にいったところよ」

「ありがとう」

「ジグに何か用なの？」

アリエはぴたりと泊まってエレナを見返す。

「ならもうちょっとしたら帰ってくるから待っててあげて。あの子女性を連れてくるの初めてだから、私ちよっとうれしいの。よかつたら朝ごはんにしましょ？」

それと同時にアリエの腹も空腹を訴えた。アリエは顔を赤くして顔を伏せる。

「ではご飯にしましょ」

「ジグは…」

「そうね…じゃあ待ちましょうか」

アリエははい。と返事をした。

「ただいまー。あれ？ エレナまだいたのか」

「まだとは何だ！ く…殴るぞ！」

おそらく、部分は喰うぞと言おうとしたのかとジグは思った。

エレナは笑い、お帰りという。

「朝ごはんにしましょ。いま出来たばかりだから」

「おう」

ジグは木製の剣を壁にかけた後、手を洗う。そしてアリエの席の向かいに座る。

「アリエがジグを待ってあげようと言ったのよ」

「な、エレナ！」

「いやいや、まさかアリエがイウワケナツ！」

途中で切れたのはジグの足をアリエの足が踏みつけたからだ。

「そ、そうですか…ありがとうねアリエ様」

「礼などいらん」

そういつてアリエはスプーンで掬ったスープを口にした。

その後、すさまじい叫び声が響いたのは書く必要はないだろう。

契約

「じゃあ、私畑の手入れをしてくるわ。その後組合の話があるからちよつと遅くなるわ」

「無理するなよ」

ジグはぶつきら棒にエレナに言う。エレナは微笑んで大丈夫よと返す。エレナは土を触っても大丈夫のような服を着ている。スカートだったのが作業用のズボンをはいていた。

「行ってらっしゃい」

「おいたしちゃだめよ？ アリエはもしされたら殴っていいからね」
「なっ！」

「了解した」

くすくすと笑うエレナにジグは顔を赤くして抗議しようとするがエレナはもういなかった。そのやり取りを見るアリエはすこし顔を暗くしている。

「んで、アリエ」

「なんだ下種が」

「…母さんがいるときはジグというんだな」

「親がいるところで息子を卑下にするのはいかんと思ってな…エレナはいいやつだ」

ジグはそうなのかなと思う。

長いこと一緒に暮らしてきた所為なのか、エレナのことをあんまり考えていなかった。そう思うとジグはなんて無知なんだろうと思う。ジグは少しぼんやりと机の木目を見ていた。

そんなジグをアリエは見ている。ジグは考えるのをやめた後アリエに話をふる。

「話を戻す。アークと戦うことについてだが、龍と共存といってもお互いは何をすればいいのだ？」

アークとは昨日聞いた大いなる敵のことだ。アリエはそのため

ここにきたといっている。ジグはそれだけしか分からないため、さらに話を聞くことにした。アリエは冷たい飲み物が入っているコップを机に置くと、簡潔に行った。

「契約だ」

「契約。とジグは言葉を反復する。」

「それはここらでよく聞く魔道師のことか？」

「魔道師？」

「ああ、清い水がどこから出るとか、いい陶器ができるように釜に願いをしたりとかそういう類か？」

「眉間に皺を寄せるアリエ。」

「たわけ。オレらを偶像崇拜するな」

「いや、俺もよく分からないし。そもそも戦うための契約なんざ聞いたことがない」

アルトリア大陸全土はすべて、空と土と火と水の聖ひつという精霊と契約をする。そのほとんどが争いごとを使うことをせず。井戸を組むときに清い水があるようにと聖に願ってから井戸を組むのだ。

逆に契約もできなく、ただ予言という迷いごとを行っているものを劣等師マルグという。

「オレらは契約といってもまったく違う契約だ。空の聖は契約をすれば何かの代償を求める亡者であり、水の精霊は金貨を求める守銭奴だ。火の聖なんぞ命を燃やす強欲でもある。だがオレら龍は契約といってもそんな者を必要としていない。いや、している。」

「どつちだよ」

「人間には一切ない。だが、オレら龍はその契約をしなければならんのだ」

アリエは尻すぼみでいって最後は何を言っているのかよく分からなかった。

「その龍との契約は？」

「だから、共存といったであろう」

「は？」

「共存。要するにオレら龍と、人間が結婚し、愛を育む事がオレらと人間の契約だ」

ジグは固まる。

結婚？ はぐくむ？ 愛を？

「はあ？」

そういつしか他になかった。

エレナは畑で雑草をむしりつつている。冬にできる芋の収穫を楽しみにしているエレナは草をむしることなど我慢できることだった。三年前に夫を亡くしてからエレナは畑仕事に勤しむ。

なぜなら愛する我が子の為を育てるためにはおいしい食べ物を食べさせたやりたい。その気持ちでいっぱいだったのだ。

「あの子は自分は独り立ちできるからという顔してるけど。ぜんぜん子供なんだから」

そう、貴方のように。と微笑みながら口にする。

雑草を根からとる。もう長いことをやってきてそのとり方もさまになっている。彼女の後ろには山になった草がある。

その草山がもぞりと動いた。エレナは雑草むしりに夢中になっていて気づいていなかった。

「いや、無理でしょ」

その言葉を言ったのはジグだった。もちろん言った相手はアリエでそのアリエは真剣な顔をしてジグを見ていた。

「ほら、人間と龍は種族が違う。だから生活も違う」

「もとは共存していた。それならお互いの生活は等しいうえにオレも野菜を食べる。主に肉を食べるが」

「子供もできないし」

「子供は……、オレは半分の血が人間だ」
ジグは冷や汗をかいた。

「オレもいままで龍と人間は一緒になることが永劫ないと思っていた。人間は大地と水を選び、龍は空と火を選んだ。人間は大地を蠢く蟻になり、龍は空を飛ぶ鳥になった。だから未来永劫一緒になることも暮らすこともないと思っていた」

アリエは胸に手を置く。

「だが、あるときオレは人間を見て感じ、思ったのだ。何故人間と龍が共存していたのか？」

すると毒が血流に乗って体を犯す感覚。動機が早くなって、呼吸が速く浅くなり、めまいがする。そうまさに毒だ。死に至る様な毒を感じた」

アリエはその蛇のような瞳孔でジグを見た。

「オレは分からなかった。この気持ちは、この毒は何か。悶え、火が私の体を焼くような苦痛。その意味が分からなかった。

だが、分かったのだ。オレは……『私』は恋をしたのだと。人間に恋をしたのだと」

アリエの瞳が潤んでいる。羞恥からか、告白なのかジグは分からない。いや、ジグは分かるうとしなかった。

「シグナ、私の『英雄』は、お前がいい……」

ジグは「ぐくりと喉を鳴らす。

「……お、俺は……」

そのとき、大地が震えた。ジグは最初は驚いたがすぐに机に手をかけて倒れないようにするがアリエは突然のことに対応できず、倒れそうになる。ジグはあわててアリエを抱きとめた。

「あ、ありがとう」

「気にするな。それよりなんだ？」

地震だと思うが今までとは違う感覚だった。長く続く揺れとは違う、爆発のような揺れ。ジグはドアを開けるとエレナの畑の方角で砂埃が雲のように立っていた。ジグはぞ割と何かを感じ取る。エレナが危ないと本能が知らせる。

ジグは自室に向かい、剣を取って外に出ようとする。

「待て！ お前一人が行って何かできるわけでもない！」

「行かなきゃ行けないんだ！ 俺の母さんが！」

「無茶だ！ 貴様のような無能が何ができる！」

「ないよ！ だけど俺は助けるんだ」

そういつてジグは外へと走り出した。アリエはその後姿を見ている。

「まただ……」

アリエは口ずさむ。胸の高鳴り。この目の前がくらむような感覚。「っ！」

アリエの体に青い鱗が覆い始める。二つに分かれていた足を一つにまとめると、骨盤のところから三対の羽を広げる。尾は綺麗に並んでいた鱗があり、蛇ではなく、魚のような尾があった。

そして一度尾を振ると一気に加速してジグを追いかけた。

「母さん！ どこだ！」

鞘に入れたままのジグは砂埃の中エレナをよんだ。この奇妙な空間の中から火とがたくさん出てくる。ジグは口を押さえながら、逃げる人の逆へと走った。砂が口の中に入って水気を取る。口がじゃりじゃりとして気持ち悪い。そして胸に残るいやな予感。

「母さん！」

その瞬間地面が割れる音が前から響き、そしてジグへと襲い掛かる。ジグはとつさに右へと避ける。だが、反応が少し遅かった。右足にあたり。体勢が崩れ肩から地面に思い切り叩きつけられる。

「つて…」

砂埃が晴れる。ジグは口にできなかった。

その目の前にいるものは巨大だった。生き物であることには変わらない。だが、それは異形だった。

それは大地を踏みしめる亀のようだ。だが、生き物ではなく、植物だ。

「なんだよ」

ジグはやっと口にした。

「なんだよこれ…アークなのか」

その巨大な亀はジグに気づき攻撃する。振るわれた植物の蔓は容易く風を切り裂き、まるで葉のない斧のようにジグへと振り落とされる。ジグはとっさに手に持っていた剣を引き抜き切りかかろうとする。

剣は折れた。

勢いをとまることを知らない蔓はジグの体を打ち付ける。左肩が碎ける音がジグの耳に響いた。

声など出ない。打ち付けられた体は呼吸することをやめ、体の筋肉を瞬間的に石のように固める。しかしそれだけで痛みから逃れることができなかった。

地面を転がり、ジグはうつぶせのまま動かない。

アークはずしんと地面を踏みしめる。足元が値のようなものが地面に張り付こうとしたが足はそれを拒絶する。

ジグは虚ろの目でアークを眺めていた。

これで俺は死ぬのか。

母さんを助けることもできないで。安全かも分からないこの状態で死ぬのか。

ジグの目から涙があふれる。じわりと血が流れるような涙を流す。その口は動いた。

「せめて目の前にいるものを守れる力が…守れる力を」

「その願い聞いたぞ」

目の前にいたのは龍の姿をしたアリエだった。アリエはジグの体をひっくり返し、顔を上に向ける。

「アリエ…」

「貴様は無力だ」

分かつてる。とジグは口にする。アークはもうそこまできていた。「だから、私が貴様に力をやる。人を守れる力を。世界を救う事ができる力を…」

アリエはそういって、ジグに顔を近づけた。

そして口づけをする。

ジグの中に入り込むアリエの舌。舌はジグの歯を舐めた後、ゆっくりとジグの舌に触れた。

アークの足がジグとアリエを踏み潰した。

砂埃が立ち、そして晴れる。

「グラムンド英雄の鞘」

その言葉と同時に、アークの足は刃に切り裂かれた。肘あたりまで切り裂いた巨大な剣は大地から生えている。アークは口を大きく開いて声を上げる。だがその声は生き物と違い、期が千切れる音だった。

「覚悟しろアーク…」

その裂いた剣に守られるようにいたのはジグとジグの左腕に抱き寄せられているアリエ。

「貴様を今ここで殺す」

その右手には光り輝く『鞘』があった。

終結

ジグは体の中からあふれる力を感じていた。血液が沸騰するようなこの力。炎のようなこの熱量。

「アリエ…何をしたんだ」

「契約……。オレの力の根源である生命力をジグに譲渡した。今ジグの体内にあるのは一匹のオレと同じ力、生命力。そしてその力の顕現はジグの本質的な力だ。エーテルナは力として変換できるし、すべての仕様はジグに任せた」

アリエは銀色に光り輝く鞘を撫でる。

「グラムンド……これがお前が持つ『守る力』」

「これが…」

ジグは鞘を改めて見た。銀色に輝くその鞘は装飾が施されて豪華なつくりだった。その鞘からはとてつもない力が宿っていると体で感じる。

アークの裂かれた足は蔓が包帯のように巻きつくるとすぐに修復した。すると足に巻きついていて蔓はジグへと襲い掛かる。アリエは手を翳すと、火の粉が溢れ出て蔓を燃やした。だが燃焼は途中で止まり、再生する。そしてまた襲い掛かる蔓は木っ端微塵になった。

「大丈夫だ」

突然大地から隔てるようにたくさんの剣が生成される。剣がこすれあい、轟く音が聞こえた。そしてその剣の壁から一本手に取ると剣の壁は崩れる。剣は切っ先を大地に突き刺さる。ジグの周囲を囲うようにたった。

「アリエは空からこいつの弱点を教えてください。俺がその急所を狙う」
アリエは蔓の猛攻を掻い潜り空へと逃げる。一本彼女へと襲い掛かるがジグはそれを阻止する。そして右から襲い掛かる蔓をアリエの蔓を切り落とした威力をそのまま殺さずに切り伏せた。蔓の切り口からは透明の液体があふれるように出、剣に付着した。剣の刀身

が蒸気に包まれる、流し目で確認した。剣の刀身が欠けている。

「酸か」

ジグは剣を捨てる。今と思わばかりにたくさんの蔓はジグへと襲い掛かった。

だが、それを切り伏せる。ジグの手にはまた同じように剣が手にあった。英雄の鞆を下衣の腰巻に刺すと少し前の場所にある剣を斬撃と同じ速さで手に取り、旋回して死角から来る蔓を薙いだ。

そして手にしていた剣で刺さっていた剣を打ち上げる、さらに持っていた左手の剣を上には振り投げ、字刺さっていた剣を手にし動かない。

全方位からの攻撃。蔓がジグに触れようとした瞬間。上から打ち上げた梟が雨のように落ちてきた。その剣は蔓をすべて貫いている。ジグは一步前に足を踏み出し、剣を手取る。するとまた蔓が襲い掛かってくる。

このままの防戦ではきりが無い。と判断したジグの目の前から剣が生えた。

十五本。直列で横に並んでいる剣を手持っていた剣で撃った。金属が擦れ、火花が散る。その撃たれた剣は矢よりも早く旋回しながら飛んでゆく。蔓を咲くと奥へと飛んでゆく。左手も剣を持つと連続で残り撃つと一本の道ができた。きり惹かれた道だが時間が経てばまた蔓の嵐になるだろう。

ジグは体をねじ込むようにできた狭い活路を通る。蔓の嵐の向こうにはアークがいる。

彼はそのアークに向けて跳躍をした。体をひねり迫りくる蔓を避け、手にしていた剣を振り投げる。大地に刺さった剣はそこを起点に砂埃が舞う。

すると蔓の動きが止まった。

ジグは、今といわんばかりに砂埃の中に入る。そしてグラムンドを大地に突き刺した。

するとアークの胴体を貫く巨大な剣が現れる。隆起する山のように

に生えた剣をアークは苦しむしかなかった。

「アリエ！ いまだ！」

そういうと、アリエは上空から隕石のような速さで落下してくる。アリエの口元から轟々と燃え盛る炎があふれ出てきていた。

その炎が剣を焼く。その剣に帯びた熱がアークの内部を焼き始めた。

炎は見る見るうちにアークの体を覆ってゆく。これで後は朽ちるのを待つだけだった。

「人間としては上々ではないのか？」

少し気分が高ぶっているのかそれとも褒めているのか。ジグはどちらにしてもよかったと思う。アークはもう動かず燃え行く木として焼かれてゆく。そして黒ずみへと変貌した。風に吹かれると、その黒ずみは粉々になり、消え去った。だが、そのアークのいた場所から人が要ることを二人は気づく。

「母さん！」

ジグはエレナを呼びその場へと向かう。エレナの体は酷い火傷をしていた。

「母さん！」

彼の呼び声に反応するようにエレナの瞼がピクリと動き、あける。

「ジグ……」

「大丈夫だ。すぐに人を……」

「いいのよ」

「エレナ……」

エレナは微笑む。ジグの目からは涙が零れ落ちる。それを拭おうとエレナの手はジグの頬をなでると、頬にはエレナの血が一本線を引いただけだった。

「あら、顔を汚しちゃったね」

「母さん……」

エレナは涙を流すとごめんなさいと一言謝った。

「私覚えていたの。ジグを殺そうとしたことも。私は……なんてひど

いことをしたの……」

「エレナそれは貴方の所為ではない」

「いえ、本当は分かっていたの。殺したいって愛情の中に暗闇があることを……ごめんなさい」

エレナの呼吸がだんだんと弱くなつてゆき、終いには咳き込む。

「母さんもうしゃべるな！」

「ジグに、貴方たちに倒されて私はよかった……」

そしてエレナは息を引き取った。

ジグはそのエレナの亡骸を抱き寄せ、悲しみの声をあげるのだった。

ジグは墓標の前に立っていた。その墓標は簡単なつくりで石が大地に突き刺さっているだけだった。この墓標の下にはエレナが眠っている。

その彼の後ろにはエレナが立っていた。エレナは彼の方へと一歩また一歩と動いてゆくとジグはエレナを見ないで言う。

「これが守る力なのか……こんな人が死ぬようなものが守る力なのか」

「……貴様は、エレナを救った。命を守ることはできなかった。だが、エレナの最後の望みは救ってやれたではないか」

「俺は！」

ぎりぎりと手を握り締める。爪が手のひらに突き刺さり皮を破り、血が流れ出た。

「俺は……こんな守る力を、……ほしくなかった……！」

ジグは苦しそうにそういうとエレナはジグの肩をつかみ、押し倒した。ジグの上にはエレナが乗り、こぶしを作ってジグの頬に吸い込まれるように殴った。

「貴様は本当にそう、おもっているのか!?!」

そしてもう一度逆の頬を殴った。

「貴様は！ 本当に！ それが！ 正解だと！ 思っているのか！」
言葉を区切るたびに殴る。ジグの唇は切れ、血が流れ出た。アリエの拳も歯に当たったのか肉が裂け血が出ていた。

「貴様がそれほどこの力を恨むなら！ それほど貴様がその力を憎むなら！ 今ここでオレが貴様を殺す！」

そういつてジグの首に手をかけ、ぎりぎりとう首を絞めた。ジグは抵抗をしない。苦しい顔をして、目を半分閉じて、硬めでアリエを見る。アリエの目は涙で溢れている。それをジグは笑うしかなかった。

「何を笑っている！ 貴様は死ぬんだぞ！」

「それでいい…母さんのところにいけるなら…」

アリエは目を見開いて首を絞めるのをやめた。そして傷だらけの手で自分の目を押さえ、涙がこれ以上溢れないように押さえつける。

「…オレは…私はジグが好きだ」

「だから英雄になった。それでいいだろう」

「私はジグに死んでほしくないのだ」

「……」

アリエは泣く崩れ、ジグの胸に顔をうずめる。そして嗚咽交じりで泣き出した。

龍の咆哮が聞こえる。

ジグはその咆哮が悲しく聞こえた。

目の前には龍なのに龍らしくない少女が泣いている。

ジグはその彼女を愛しく思った。彼は彼女が泣き止むまで彼女の肩を抱き寄せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8702z/>

とある英雄の物語

2012年1月6日13時45分発行